

第2回 土佐の皿鉢ゼミ開催

（於 高知大学朝倉キャンパス）

平成31年2月3日（日）に教職実践高度化専攻（教職大学院）院生の実践研究発表「第2回土佐の皿鉢ゼミ」が、教職大学院の院生、専任教員、教育実習指導者、教育委員会等、大学内外の教育関係者等、約100名が一堂に会し開催されました。第2回目では、院生の取り上げた高知県の様々な教育課題について、昨年8月に開催された第1回皿鉢ゼミでの指導助言を踏まえてまとめあげた1年間の学習の成果の報告がなされました。さらに次年度に向けての課題を探ることを目的に、現時点での教育課題を多様な視点から分析することで実践的な探求ができました。

はじめに柳林信彦専攻長の開会挨拶があり、続いて高知県教育委員会教育次長 長岡幹泰氏 より「高知大学教職大学院の院生に期待すること」と題した講話をいただきました。長岡氏からは、本大学院の高知県の教育課題の解決と新たな学びの創造に向けた研究や大学と教育委員会と学校との協働・連携の拠点としての役割について、院生には、高知県の教育推進のためのバージョンアップ、あるいはリニューアルされたリーダー教員としての成長や教職大学院の価値づくりの伝道師・メッセージャーとしての役割の重要性が語られました。その後、「学校運営コース」（2名）「教育実践コース」（4名）「特別支援教育コース」（7名）にわかれて、それぞれ口頭発表とポスター掲示、共通する本質的問題についてコース別討論会が行われ、最後に全体討論会で多くを学ぶことができました。ご参会くださった方々のアンケートからは、院生らがそれぞれに教育課題に積極的アプローチがなされていたこと及び広く県内での活用を期待する声が寄せられました。

ここでは、皿鉢ゼミで口頭発表した院生と海外留学中でポスター発表をした院生から、この1年間の研究課題における成果と課題と、各コース別討論会の様子を語ってもらいました。

【学校運営コース】

渋谷具恵さん「学校組織マネジメントの研究～地域協働参画による～」

地域の教育資源を最大限に活用した教育・学びのネットワーク構築として『TSUNO MODEL』を提案し、①学校と地域を円滑に結ぶ「総括コーディネーター」について考えること、②学校における「総合的な学習の時間」の活用方法を把握することを中心に研究を進めて参りました。成果は、学校と地域が協働していくための基礎的知識を共に獲得し、共通理解を図っていくことの必要性が明らかになったことです。課題は、学校・子供と地域を取り結び、両者ともにメリットを享受しうるカリキュラムの創出として、「総合的な学習の時間」のカリキュラムマネジメントに「総括コーディネーター」や「地域コーディネーター」がどのように関わっていくのかを探っていくことです。そうすることで、『TSUNO MODEL』を体系化し、システム化していく必要があります。今後は、この課題についてさらに研究を深めて参ります。



坂本興彦さん「学校経営計画の効果的な運用の方策<若手教員+ミドルリーダー+管理職>による効果的なOJTシステムの構築」



学校経営の核となるべき学校経営計画を、教員の業務（授業・学習指導・学級経営・生徒指導・学校行事・校務分掌）の中に埋め込み、OJTなどの緩やかな規準として位置づけるとともに、教員がマネジメントスキルを磨くトレーニングの一環としても活用するなど、その効果的な運用の方策について研究してきました。若年育成には「研究推進」を軸として体系的に進めるのが効果的であり、学年団・研究部など重層的に取り組むことで、学校の組織文化の形成にも資すること、「研究」は学校の柱でもあり、マネジメントスキルを磨く（人材育成に）最適な教材であること、などが分かってきました。今後も、授業改善・個業の解消・人材育成などの高知県の課題解決につながる実用性の高い枠組みづくりを目指して研究していきます。

【コース別討論会】各研究は、誰にどんなメリットがあるか…マネジメントを取り入れ、「整理分別能力を高め、問題解決的な思考を身に付ける」ことによって「働き方改革」につながるものが教員や学校、高知県教育委員会にとってのメリットとなること、また、「総括コーディネーター」を配置することで、「開かれた教育課程の実現・働き方改革・地域の活性化と生きがいづくり・学力向上」につながり、学校・地域ともにメリットが享受できること、を確認しました。

研究成果を意識した今後の研究の方向性として、「新規性・県の課題への対応と効果が明確になるように意識して研究を進めていくこと」や「教科会・縦持ちにおけるマネジメントの位置付けの整理」「地域との関わりにおいて、学校がリーダーシップを取った方がいいという考えについての整理」「学校教育内容の理解に対するコーディネーターの不安を、教員がどの程度把握しているか」といった相互の意思疎通に関する調査と手立ての必要性などが確認されました。また、研究として取り組んでいることが学校現場で取り入れられるように、すべきことと効果を分かり易く伝える準備と、実践可能な形を意識すること（人的コストや働き方改革を十分に考慮した提案とする）等多くのご示唆をいただきました。

【教育実践コース】

杉田亮介さん 「構成的グループエンカウンターを取り入れた不登校児童の予防的・開発的実践」



介入プログラムを実施することによって、児童は自分自身への理解が深まり相手の良さを見つけたし相手の立場に立って物事をとらえたり、考えたりする事を体験しました。それによりクラスの人間関係がよくなり、授業に対しても前向きな気持ちで取り組める児童が授業後の振り返りから見て取れました。このことから児童の実態把握をしっかり行い児童の実態に応じた授業を構成していくことが課題解決に向けた取組として有効と考えます。介入前後の比較では振り返りによる児童の意識変容は見られたが、有意差は見られませんでした。その要因は、自分の伝え方が不十分で、子ども達が自分のこととして捉えにくかったこと、自分の授業実践が中心となり継続しての課題解決には至らず単発的なものに終わってしまったためだと考えます。来年度は、実習から見えてきた課題改善をおこない、さらに研究を深めていきたい所存です。

竹本佳奈さん 「児童生徒の学びを生かしたつながりのある中学校英語の授業の開発」

県内の全公立中学校で設定している英語の学習到達目標（CAN-DO リスト）と小中連携、タテ持ちとの関係を分析し、小学3年生から中学3年生までを見据えた英語教育を充実させるために必要な要因を検討しました。現状把握のためタテ持ちを実施している複数の中学校、10名の英語教員にインタビュー調査・アンケート調査を実施しました。その回答を定性的コーディングにより分析した結果、小中学校をつなぐためのCAN-DO リストの必要性、設定したCAN-DO リストの形骸化が示されました。先行研究で示されたCAN-DO リストの役割や効果によると、機能的なCAN-DO リストの活用により生徒の学びが繋がると思われるため、今後は生徒の学びを生かす英語教育、すなわちCAN-DOの達成に向かう教師の指導の要素を検討します。



平林香里さん 「支持的基盤のある学級づくりにつながる道徳授業の在り方に関する実践的研究」



今回の発表では、授業実践の内容を中心に、1年間の研究のまとめを発表しました。実習Ⅰでは、言語活動を生かした道徳の授業実践を10回以上行いました。授業の中に討論形式やグループ活動、ディスカッション等を取り入れ、生徒が意見を交流する時間を多く確保できるようにしました。しかし、まだまだ教師が話す時間が長く、生徒主体の授業になっていません。生徒が主体的に授業に取り組めるよう生徒の本心に迫る発問を考えていく必要があります。また、生徒の道徳性を高め、支持的基盤のある学級づくりにつながるためには道徳の授業だけではなく、日々の学級活動やその他の教育活動も重要であり、来年度は特別活動や他教科と道徳授業を関連させた単元計画を立案し、実践していこうと考えています。

村田由香梨さん 「数学科における主体的・対話的で深い学びにつなげる授業改善」

数学の学力向上のためには、生徒の数学に対する学習観や姿勢を客観的に分析・考察する必要と、数学学習理論に基づいて生徒の興味関心を引き出し、学びを深める教材とその効果的な学習指導方法を開発する必要があると考え研究を進めてきました。数学的モデル化、Freudenthalの数学化の理論をもとに中学3年生の「いろいろな関数」、動的幾何学習場の理論をもとに中学2年生の「平行線と角」、What-If-Not ストラテジーの理論をもとに中学1年生の「比例と反比例」の教材開発と授業実践から、深い学びには数学学習理論に基づいた教材開発が重要であることが分かりました。しかし、生徒の思考や問いの連続性を意識した授業づくりには、さらに数学学習理論に基づいた教材と指導法の開発研究を続けたいと考えます。



【コース別討論会】

高知県の教育課題における「知」「徳」に関し、二つのテーマを設定し、参加者からご意見をいただきました。一つ目のテーマ「子ども同士が関わり合って学ぶためには」については、①全教育活動が関連し合っていること、児童生徒に付けた力、考えさせたいことをまず設定すること、子ども同士の共感的な人間関係等を大切に授業構成や学習活動の工夫、②研究実践が学校で広くなされるための、他教員と院生との共有、院生以外の教員による実践と発信、③院生と他教員の関わり、全教員で取り組むという意識による研究の活用等のご意見をいただきました。二つ目のテーマ「子どもの学びを充実させるために、指導者には何が求められるか」については、適切なレベルでの子どもの達成感、教科の専門的なおもしろさへの関心、教科の系統性・教材内容の把握・吟味、子ども個人の伸びの把握、教師自身の意欲等が話し合われました。

人間関係づくりを土台とし、同僚との共通理解、共通認識、共有、適切な実態把握による指導や評価に対する教師の認知が重要であり、多くの教員とこれらのことを理解し合い、実践を重ねていくことを目指したいと考えています。

【特別支援教育コース】

小川裕代さん 「知的障害特別支援学校における実態把握の方法と個別の計画の効果的活用」



実践研究では3名の自閉スペクトラム症児について心理アセスメントを行いました。アセスメントで導き出された本人の強みを最大限生かして指導・支援を行うことや、指導の効果が得られない場合には教材や指導方法を変更するなど、なぜ分からないのか、どうすれば分かるのかを追求し続けることで、子どもの“わかる”“できる”につながることを学びました。皿鉢ゼミの協議では、心理アセスメントや個別の指導計画の効果的活用が小中学校においても共通課題であることが確認できました。来年度は特別支援学校のセンター的役割として小学校の教育相談の場において心理アセスメントがどのように効果的に活用できるか検討していきたいと考えます。

近藤沢磨さん 「フィンランドにおける自立活動と個別の教育支援計画の研究」

私は、フィンランド教育における幸福感の観点から日本の自立活動、個別の計画について研究しています。本年度は、フィンランドの幸福感に関する文献研究と、個別の指導計画の作成・自立活動の授業実践、の二つを軸に研究を進めてきました。成果として、幸福感の具体的な概念と、それを特別支援学校における個別の指導計画、自立活動の授業の中でどのように実践することができるのかについて整理することができました。課題として、より効果的な幸福感向上に繋がる指導、支援、評価の方法について今後研究を進めていきたいと思っております。今回の皿鉢ゼミでも、多くの先生方からご助言をいただきました。来年度には、高知県の教育課題に少しでも貢献することができるような結果を残すことができるよう、研究を進めていきたいと思っております。



名倉 忍さん 「小学校低学年児童への学習困難に対する個別の教育支援計画の研究」



低学年児童を対象に実施した「読みの流暢性」指導の効果についてまとめました。本県の課題の一つである「読解力」を身に付けるために必要なスキル「読みの流暢性」を向上させるために、特殊音節に焦点を当てた多層指導モデルMIMを活用しました。月に一回のアセスメントテストの結果から、子どもたちの読みの力の向上が見られましたが、同時に伸び悩む子どもの姿も浮かび上がり、かれらへの支援体制の構築など課題も見えてきました。また、多忙化する現場でこの実践を生かすために、学力テストとの相関を見ていき、「読みの流暢性」の指導の重要性を伝える必要があると痛感しました。

奈良雅子さん 「発達障害を有するもしくは発達障害の支援が有効な子どもへのチーム支援」

通常学級の特別支援ニーズのある子どもの支援に携わりたいと考え、今年度は巡回相談について考察を行いました。巡回相談が校内支援体制整備に有効活用されるための重要な視点として、①相談員の教員は対象児に関する助言に加え、学級指導やチーム支援、組織マネジメントの視点からの助言を意識的に行うこと。②助言を受ける教育機関側は、助言内容を担任の個業に任せずチーム支援の具体化を進めること。その際、協議を可視化することで参加者の意識のズレの防止と当事者意識の高まりが期待できると思われまます。

また校内支援会が専門教員の力量形成の場となりうると考え、今後は在籍校にて校内支援体制のシステム構築と、コンサルテーションスタイルの開発を実践していこうと考えています。



畑山ふみさん 「特別支援教育における自己理解と言語的表現の支援」



高等学校の生徒指導上の課題の要因である「人間関係構築」に着目して、今年度は研究を行いました。人間関係がうまく築けないこと背景として、発達障害の特性や心理的影響、またそれ以外の要因がどのように構成されているのか、また生徒に必要なスキル・求めるスキルについて明らかにすることを目的としました。生徒への質問紙調査の結果から「生徒間の関係開始」が“できない”と自己評価する生徒が多く、「自分で物事を決める力」「自分の考えを人に伝える力」「友だちと仲の良い関係を保つ力」を身につけたいと思っている生徒が多くいることがわかりました。来年度は、生徒に必要なスキル・求めるスキルについてさらに検証を進め、「ホームと授業が連動したSST」について実践活動に取り組んでいきたいと思っております。

【特別支援教育コース】

弘田幸嗣さん 「発達に課題のある生徒の把握と適切な指導方法の確立」



本年度は、発達障害の中でも学習障害（LD）に焦点を絞って研究を進めてきました。ASDやADHDと比べて、LDは見取りにくい症状です。そのため、所属校にある教育資源を活用して一覧にまとめ可視化する作業から行いました。さらに、授業観察や生徒の成果物、担任の聞き取りも含めて、学習に困難さの可能性のある生徒を同定することができました。その後、校内研修を設定し、一覧を基に個別の指導計画の作成・評価・改善まで実施しました。生徒の変容だけでなく、作成者である教員の良い変容を与える効果があると実感しました。また、合理的配慮に基づく教育支援は、本人の訴えや保護者の了承が必要であるため、特別支援教育に対する啓発を行うことが必要であると考えられます。「特別」ではない「特別支援教育」の実現に向けて、さらに研究を進めていくつもりです。

山浦祐香さん 「特別支援学校における就学前教育と義務教育の接続」（ポスター発表）

今回のポスター発表では、就学前教育と義務教育の接続に関し、デンマークでの現地調査を通して、特に保育士や生活指導員としてのペタゴーの役割や専門性について考察させていただきました。ペタゴーの専門性の一つは、生活指導を中心に、子どもの感性を豊かにすることであると推察していますが、今現在も現地調査中です。教育機関によっても異なってくるペタゴーの役割や専門性を引き続き明らかにし、就学前教育と義務教育の接続につなげていきたいです。

fra Danmark

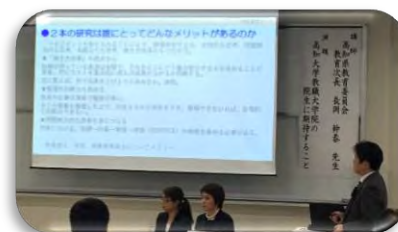
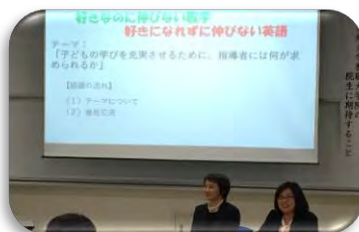


【コース別討議会】

協議では、小・中・高等学校、特別支援学校の教諭および管理職、高知県教育委員会や教育事務所、教育センターの指導主事、また一般の方々など、多くの方からのご意見をいただきました。特別支援教育の課題という大きな“皿鉢”を囲んで、それぞれの立場を超えて議論する場となりました。

協議の論点として、教職大学院生が実践研究で効果的であると導き出した観点や指導方法について、学校現場でどのように定着させていくのかといった体制構築の課題について意見を交わしました。具体的には、心理アセスメントの指導への活用や、幸福感の個別の指導計画への反映、巡回相談の場での視点の共有、低学年からの読みの継続した指導、教員や保護者の特別支援教育理解、高校生の対人関係の問題とソーシャルスキル、校種間の引継ぎ・連携などがテーマとしてあがってきました。

協議の場面では、そのテーマを深め、次の課題へとつながる意見がたくさん出されました。学校長をはじめとする管理職の特別支援教育への理解啓発や、研究部や生徒指導部など各部署との共通理解と連携の推進、指導の導入や体制整備を行うことによる教育効果を示すことの必要性、今ある体制を活用してユニバーサルデザインの視点で指導・支援の工夫をすること、高校生であればそのことを学ぶ意味や必要性を伝えることの重要性など、たくさんご意見ご助言をいただきました。教職大学院生の実践研究が、個々の課題意識にとどまることなく、高知県の教育をよりよくすることに一歩でもつながるよう、これまでの研究に協議で出された視点をプラスして、来年度の実習、研究に生かしていきたいと考えています。



院生が取り組んでいる研究には、高知県の教育課題を解決し学校現場に広く浸透する期待が多く寄せられました。理論と実践が結び付く来年の結果が、高知県全体で有機的かつ緊密な連携協働体制へつながる期待と、リーダーシップの磨かれた教員が育つ期待も語られました。次回の「第3回土佐の皿鉢ゼミ」は、来年度8月21日（水）開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 柳林信彦

編集者：教職実践高度化専攻ニューズレター委員

発行日：2019年3月10日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）

TEL 088-844-8457

E-mail ks33@kochi-u.ac.jp